

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成22年度:168.

進行期大腸がん患者の低位前方切除術後の排便障害に関する文献的考察

小倉笑子、濱田珠美

# 進行期大腸がん患者の低位前方切除術後の排便障害に関する文献的考察

○小倉 笑子<sup>1</sup>、濱田 珠美<sup>2</sup>

<sup>1</sup>旭川医科大学病院、<sup>2</sup>旭川医科大学

## 【目的】

大腸がんの外科療法の一つに低位前方切除術（以下LAR）があり、肛門が温存される利点がある。一方でLAR術後に、神経障害による便失禁や頻便、血流障害による便秘などの排便障害があり、身体的問題だけでなく、社会性や心理面にも影響する健康課題である。そのため本研究では文献検討を行い、LAR後の症状アセスメントの視点を考察した。

## 【研究方法】

情報源はPubMedと医学中央雑誌Webを用い、研究対象年を1999年～2009年とした。キーワードを「進行期のLAR後の大腸がん」「排便障害」「看護」として、各語群内は論理積（OR）とし、3群の論理積（AND）で文献検索した。エビデンスの水準を基に評価し、臨床疑問（LAR後の排便障害リスク要因、症状と持続期間、健康問題）に沿って情報を抽出、考察した。

## 【結果】

英語文献11論文、日本語文献13論文であり、ケース・コントロール1件、臨床研究16件、準実験研究1件、

文献レビュー3件であった。LAR後の排便障害のうち、少量ずつの頻回な排便、便意頻発は腸造壁術で対処された。一方で便とガスの識別困難、肛門周囲痛、便秘、soilingは生活に支障をきたす困難を生じていた。LAR後の排便障害リスク因子は、術式、術後の直腸機能、術後の心因要因、術後の生活行動、骨盤底筋の脆弱性の強い女性、内服薬、患者教育、LAR後の排便障害への対応があった。LAR後の排便障害は術後早期から始まり、半年で障害程度も増すが、1年以降で回復傾向にむかった。LAR事例では腹会陰式直腸切除事例より術後QOLが低く直腸切除後の不満足な機能、尿意切迫、排便、大便失禁を生じた。LAR後の排便障害に対するセルフケア行動がうまくいかない時に患者の生活上の制限を生じていた。さらに生活上の制限は排便障害が高度になるにつれ増し自尊感情を低下させていた。

## 【考察】

看護師はLAR後の排便障害のリスク因子からアセスメントすることで、予測される症状を早期に発見し、対処方法を提供できると考えた。